サセックス・ダウンズメン協会（The Society of Sussex Downsmen）の活動：1943-1945

坂梨　健史郎

はじめに

イングランド南部に位置するサウス・ダウンズ（the South Downs）は、東はイースト・サセックス州から西はハンプシャー州にまで続く長大な丘陵地帯であり、それはロンドンを含むイングランド南部の多くの人々に今日まで愛されてきた。それは牧草地として機能しただけでなく、人々に散策と眺望の場を与え、その景観はイングランド南部の、時にはイングランド全体の自然のシンボル的存在となってきた[1]。

そのサウス・ダウンズのサセックス州内での景観保全やそのほか通行権等の保護を主な活動目的とする団体がサセックス・ダウンズメン協会（The Society of Sussex Downsmen、以下「SSD」とする）である。この非営利組織は1924年、サセックス在住の文人アーサー・ベケットArthur Becketttを会長として、サセックス州およびロンドン在住の名士によって結成された。この非営利組織は今日でも活発な活動を続けているが、本稿は1943年から45年初頭にかけての活動状況について概観するものである[2]。

1943年1月16日の評議会において、スコット・レポートおよびアスウォート・レポートが議題となった。ベイトリーとデリマンが両報告書を精査した結果、SSDとしては東および西サセックス州協議会による現行のダウンランド保全計画に協力してゆくほかないとの見解であると報告した。

ストリングトンのヘアズウィズ・エステートの保護について、サウス・ダウンズ保全トラストから報告があった。トラストの評議会員が慎重に考慮した結果、この地所は正確にはダウンランドではないが、保護に値するものであり、この提案は検討するに値するものであると結論した。よって「この度の遺贈の申し出は原則として受け入れる」の提案がなされ、全会一致で議決された。

また、ブライトンの著名な弁護士でダウンランド保全の熱心な支持者で

もあるケネス・ローダーにベイトリー議長が依頼したところ、名誉顧問弁護士就任を快諾された旨報告された。

1943年8月14日の評議会の冒頭、逝去した会長への哀悼の意が表された。また「諸般の事情により」年次総会の延期が討論され決議された。

続いてフィンドン教区のフットパスの閉鎖と迂回路の通告が1943年6月19日付の『サセックス・デイリー・ニューズ』紙に掲載された件が議題となった。名誉書記が西サセックス州評議会に即刻照会したところ、当該フットパスは道路安全上の理由で迂回措置がなされているとの回答があったことが報告された。

ナショナル・トラスト幹事からの内密の情報提供により、同トラストがおよそ9000ポンドを保有していることが明らかとなった。同トラストには当然ながら現在様々な提案が殺到しており、その採択に関してSSDの意見を求めたいとの依頼であった。イーストボーン近くのミルトン・ストリートが手ごろな候補地だが、この提案は同地を訪れたトラストのエージェントによって「未知なる理由により」受け入れられなかった。そこで今度はヘイスティングズ付近のフェアライトのある地所に関して慎重な問い合わせを行うことが提案された。

1943年8月10日に都市田園計画省地域計画官のH.R.ウォーデルがSSDのベイトリー議長を訪れ、同省とSSDとの緊密な協力について二時間の会談を行った。この点は長年にわたってSSDの目標であったため、このことはSSDの歴史の中で「最も重要な前進の一つ」と議事録で形容されている。

この会談の中でウォーデルは、同省がSSDの助力を必要としていること、およびその見返りとしてSSDを大いに支援することを述べた。ウォーデルに依れば、SSDは（地元の協議会にしばしば見受けられるのとは違って）なんら既得権益を持たず、まさにその理由によって同省の計画を支援するのに理想的な団体である。ウォーデルは土地が寄付金で購入されることには同意せず、国民（nation）のための土地は政府によって購入または保全されることを主張した。国民（nation）のための国家の土地、という発想である。SSDがどんなに些細な脅威でも耳にしたならば、迅速に通報を受け、措置をとりたいと述べた。彼はまた、SSDが彼に視察を望む土地があればいつでも赴くことを快諾した。また、SSDが保全すべきと考える地域を慎重かつ徹底的に地図上に表記するための特別調査委員会(select committee)をSSDが設置してくれればありがたいとも述べた。これは時間

がかかる仕事であると十分認識しているので、その完成の折には必要と思われるいかなる会議にも出席し、いかなる地区も訪れたい。東西サセックス州評議会とは完全なる合意に達しているものの、さらに高度な目標を促したいとウォーデルは述べた。

評議会のメンバーは尋常ならざる興味を持って上記の内容を討論し、SSDへの謝意に対して十全なる感謝の意を示した。その結果、戦後ダウンランド計画を扱うために任命された現行の小委員会（デリマン、ベイトリー夫妻、ペッパー、ウィーラー、クルック）が地域計画官の想定する特別委員会を構成することおよび、同特別委員会が各地区の責任者と連携をとることが決定された。併せて早期の開始が合意された。

この段階で、デリマンが巡回書簡を地域の各協議会に送り、各協議会がダウンランドおよびカントリーサイド全般に関して「決定的な」計画を策定する前にその意図についてSSDに通知してもらうことが提案された。SSDの知識と助言によって、最終的にSSDが反対するような計画になってしまうことを各協議会があらかじめ回避できるようにするというこの考えは賢明なものとみなされ、デリマンが起草を委任された。

1943年12月18日の評議会では、ブライトン当局がスタンマー・パークを公共スポーツグラウンドにすることを示唆したとする報道に名誉書記が言及し、その考えに憤慨した彼女は『サセックス・デイリー・ニューズ』紙に「憤慨中(Indignant)」なる仮名で投書し、ちなみに同紙も計画に対する嫌悪を表明したと報告した。彼女はまたチチェスター伯爵夫人にも個人的に書簡を送り、スタンマー・パークが売りに出ていることは事実かどうかを問い合わせると共に、そのような「略奪(spoliation)」を防止するために必要ならばとSSDの助力を申し出た。伯爵夫人からは同地所は売却予定ではなく、そのような提案を最初に知ったのは報道においてであるとの回答があった。

この件に関して議論がなされ、同計画は馬鹿げており、明らかに世間の反応を見極めるための探りであるということで意見が一致した。とはいえ、SSDの最近の都市田園計画省との緊密な関係のおかげでそのような計画が実現する可能性は高くないと思われるため、現時点では現実的な危機は感じられず、ビーミッシュが下院議員としての立場を最大限に発揮することを約束し、また再建省の新大臣が彼なりの計画を早期に公表する可能性もあり、その際はSSDが有利な立場でこの案件を再び議論できるだろうと思

われた。

地区責任者は軍によって舗装された道路をすべて地図上に表記することが求められた。地域計画官が恐れたのは、もしこれが戦後も残存した場合、自動車によって利用されてしまい、建売業者が沿道の土地に目をつけてしまうという点であり、彼は戦後すみやかに舗装の除去を支援することを切望していた。

演習地域連絡将校インガム大尉からの書簡の授受を名誉書記が報告した。大尉は書簡に地図を添付し、地図上の演習地域内に表示されている歩道、小道、通行権道路の一覧の作成でSSDの助力を求めた。彼はまた、防衛規則第16条に基づいて閉鎖されたことが判明している道路についても情報を求めた。これは困難な仕事であるが、議長が個人的に引き受けることとし、順調に進捗しているとの報告があった。

1944年4月15日の評議会では、各紙が名誉書記の要請を広く報道し、評議会の書簡を全文掲載したことが報告された。特に『イーストボーン・ガゼット』紙が1944年3月15日付で書簡を掲載しただけでなく、SSDと戦後計画を重要視する記事を掲載したのは喜ばしいことであるとされた。

前回の評議会以来、ブライトンのスタンマーを公共スポーツグラウンドへ転用する案が示唆された件について、この「馬鹿げた」計画が論議され非難されてきたが、若きチチェスター伯の突然の悲劇的な死（著者注：軍役中の死亡）によりスタンマーの安全が一層重大な危険に陥ったかに見えた。しかしこの危険は、故伯爵の若き妻に継承者たる子息が誕生したことにより、いまや少なくともしばらくは回避された。

最後に、チチェスター一族に起きた「出来事」に関して、名誉秘書がチチェスター伯爵夫人に祝いの書簡を送り、子息の誕生へのSSDの喜びをお伝えすること、また同家のモットーである「国／田園への愛が勝つ(Love of the Country prevails)」がこの重大事において特にふさわしいので、同モットーに対して同書簡中で相応しい言及がなされるべきことを会長が示唆した。

東サセックス州計画の諸問題に関して助言するためにサセックス田園共同体評議会により委員会が結成され、それにSSDが招かれたことを議長が報告した。

1944年4月29日の年次総会の席で、ビーミッシュ会長がベケット前会長を追悼する演説を行った。「いまやSSDも21年目であり、その活動におい

て地域密着であるだけでなく、この崇高で平穏な空間を今までに見たり移動したりしたことのある人すべてに愛情と誇りと賞賛という点で訴えかけてくるこのダウンランドの一地域を保全したいとする、SSDの視野は全国レベルのものである。

「しかしながら人類はその無思慮な怒りと敵対心と性急さによって他のいかなる動物よりも自然の自然な美[ママ]の破壊に功があった。

「計画や計画者たちは日々の話題となり、我々もまた計画を持っている。我々の生活の精神的および人間的側面に反抗するかのように物質に過度の重点を置きたがる人々の大量発生を、理性と行動とで抑制するという計画である。というのは確かに、自然と美への愛は精神的なものだからである。ダウンランド・スピリットが我々を鼓舞するのだ。どのような助けを我々は持っているだろうか？

「我々には都市田園計画大臣がいる。彼曰く『我々が目指すのはこの国の田園の快適さを保全することです。この田園一帯がその景観美とそれに付随する野性味と開放感で特別な価値と相応しさを行楽客に提供し、彼らが昔のままの自然との触れ合いを通して野外のレクリエーションと心身の健康回復を得ることが出来るように』

「現在は田園である場所においても、何らかの都市的な快適さが必要だ。ロンドンの計画だけでロンドン外への人口移動を60万人に想定している。この事と関連して、都市田園計画中間開発法が施行済みであり、これは大きな意味を持つものだ。というのは今や地元当局が中央からの積極的な監督の下にあるからだ。あの多くの嘆かわしい染みを我らが美しい土地につけた張本人である、不動産屋という名の者たちに引導を渡したのだ。

「我々は確信する、強力で広範囲にわたる法案が遠からず提出されることを。そして、我らの地域に対して戦時中広範囲に与えられた無数の窮状や損害に対処するであろうことを。政府はこれらの深刻な問題を明確に理解しており、また我々は政府に思い出させなければならない。そして戦争と我々の生存と暮らしを賭けた戦いがもたらす、よりおぞましい顕現を数えたてなければならない。我らのダウンズという緑の滑らかな覆いが戦車や砲弾やその他の破壊装置によって剥ぎ取られ、切り裂かれてしまった。どうにかしてその傷跡は癒されなければならないし、我々は治癒と回復を見守る看護婦や看護人にならなければならない。

「大臣曰く、『あなた方とCPRE（著者注：Council for the Preservation

of Rural England英国田園保全協議会）そして同種の諸協会および支部は計画の番犬であり、我々に危険を警告し、我々が期待を裏切らないようにするために常に警戒してくれているのだ』と。（中略）最後に、我々は忍耐強く、自信を持って、わが国と世界に覆いかぶさるこの巨大な出来事の結末を待たなければならない。」

1944年10月14日の評議会において、ダウンズの軍用道路に関するクルック博士からの書簡が報告された。これに対して名誉書記は返信で、SSDは地域計画官が軍の徴用官補佐と連絡と取り合っているという保証を地域計画官本人から得ているし、また会話の中で、地面に敷かれたいかなる道路も元々の道路でないものは撤去されるし、またいかなる道路もフットパス上にあるならばフットパスとして回復され、二輪もしくは四輪交通用に放置はされないと地域計画官に言明されていることを博士に伝えたと報告した。評議会の出席者はクルック博士の懸念を共有した。一旦自動車等がこれらの道路を使い始めたらそれを止めるのはきわめて困難で、建築開発がその次の脅威であろうという点を全員が認識していた。クルック博士は、まもなく撤去されるコンクリート製の対戦車障害物でこれらの道路の両端を閉鎖することを提案しており、この提案を関係の地域当局に提出するのも有用かもしれないと同意があった。

フィンドンのタイン大佐とイーストボーンのクルック博士は双方ともダウンランドの芝地の荒廃を懸念しており、さほど人が入らない場所に関しては自然自身がその傷跡の多くを癒してくれるとしても、いくつかの地域では芝の再移植が回復への唯一の解決法であると思われ、この線に沿った内容で書簡を戦争省に送ることが提案された。

ウィーラー博士が名誉書記に寄せた書簡の中で、教会カントリーサイド協会(Church and Countryside Association)をサセックスで結成することをSSDで考えてはどうかという提案があった。この件について討論されたが、この運動は基本的には土地問題ではなくむしろ教会問題であるという認識がなされ、現時点では行動をとらないことが決められた。

次に、デリダンがウッディングディーンのウィックボトムに関して新たな脅威が持ち上がっていることに言及した。以前にブライトン当局により土葬地域の指定を受けた場所に同当局が宅地の造成を現在検討中であるとのことであった。ウッディングディーンの納税者および居住者協会に書簡を送り、SSDとの積極的な協同を再確認することが合意された。

1945年2月3日の評議会では、徴発地所および戦争工事法案(Requisitioned Land and War Works Bill)について討議された。この法案は現在議会で審議中であり、本当の意味で人々の動揺を引き起こしている。もしこれが現在の形のまま成立すれば、何千エーカーものオープンスペースが失われる危険に陥る。同法案では、徴発した土地を回復するかどうかの選択権を政府が保有し、その費用がかかりすぎることが判明した場合にはその土地を処分する権限も政府が持つことになっている。ビーミッシュ海軍大将の説明では、この法案（ちょっとした爆弾である）を詳細に検討したところ、そのどこにも都市田園計画省大臣の名前が見当たらない。ある大規模な私的委員会が財務大臣と折衝し、同法案は実際の言葉遣いから理解されるようなものではないということを議員たちに納得させるように大臣に要請した。結果としてはいくつかの疑念が解消され、政府はこの法案の評判に明らかに動揺しており、第二読会への提出を延期することに同意した。目下のところ、50から60箇所の修正の結果、かなり変更された法案が出現する見込みがあるとのことであった。

地域計画官に提出された極秘の報告書の写しが評議会員と地区責任者たちに回覧され、また地図の写しの完全セットがSSDの保存用に作成された。前回の評議会では州の東半分だけが閲覧に供されたが、今回は、評議会員たちは目の前に置かれた2万５千分の１の地図上に表示された形でサセックス州のダウンランド全範囲を検分するよう求められた。評議会員たちは地域計画官ウォーデルが個人的に召集したもので、地図の原本は彼の手にある。この情報を提供してもよいという示唆をしたときにSSDが反応してくれたことに彼は大いなる謝意を表した。彼はこれに伴う全ての大変な労苦を認識し、地区責任者の報告書から集められた極めて貴重な情報に大変感謝しているとのことであった。ウォーデルはこの調査で午後一杯を使って地図のあらゆるセクションをつぶさに検分し、議長はこの機会を使ってホリングベリー、ウィックボトム、スタンマー、シフナー・エステートに関して、およびダウンズの道路という大変厄介な問題に関してSSDの見解を口頭で強調した。ウォーデルはどのダウンズマンにも負けないサセックスへの愛情を持ち、かくも影響力のある人物がその職にあるということは大いなる幸運であるというと議事録に言及されている。

当該の地図は次いで評議会員たちにより検分された。ビーミッシュ海軍大将は、もし議長が同意するならば、SSD会長としてこの極秘報告書の写

しを個人的に都市田園計画大臣W.H.モリソンに提供し、併せてSSDが地域計画官と協働して行ってきたことをモリソンに説明したいと提案した。そうしておけば最終的に要望が大臣に上がった際に説得力が増すし、また地図の一区画をサンプルとして見られることは大臣にとって興味深いだろうと述べた。ビーミッシュの提案は大変貴重であるとしてそれに従うこととなった。

次に、ダウンズの道路について名誉書記が報告した。ダウンランドの多くの地域に軍が設置したコンクリートその他の舗装道路について、その正確な位置を名誉書記が戦時輸送大臣に書簡で直接照会した。同書簡の中で名誉書記は、現在ダウンズの一部は一時的に立入禁止であり、どこに道路が実際に作られたか知りようがないので、こちらから地図を送るので戦時輸送省のほうで道路の作られた場所に印をつけてくれないかと提案した。これに対しては曖昧な返答が来たが、その件は南部方面司令部土地周旋官(Southern Command Land Agent)に問い合わせてはどうかという助言が付いていた。よって問い合わせがその宛先になされたが、SSDが引き出すことの出来た回答は、必要な問い合わせの最中であるということと、早い時期に更なる返答をすると約束されたということだけで、それ以上の連絡はなかった。1945年2月3日にウォーデルが別件で議長を訪問した際に、この件での我々の通信について彼に伝えたところ、彼自身がウォード大佐に問い合わせてみる、彼とは地域総本部で連絡を取り合っているから、と約束した。現在この新しい展開を評議会としては見守っている。ダウンランドの芝の回復の問題に関しては、この点を持ち出す前に、道路に関してどのような前進が可能か確かめるのが賢明かもしれないという感想を名誉書記は抱いていると報告されている。

未払いの会費に関する督促状の送付の結果、名誉秘書はある会員から「銀行からの不当な要求その他が農業に苦痛をもたらしている」件に関する様々なパンフレットを受け取った。送り主はSSDに対して調査を依頼し、農家と地主を助けるよう求めてきたが、この種の協会がそのような議論の多い政治的な案件に立ち入ることは当然ながら不可能であると判断し、同書簡に対して受け取りは出したもののそれ以上の通信は慎重に中止された。

『ウエスト・サセックス・ガゼット』紙がピーターズ・フィールドとその周辺の景観美を保全し増進することを目的とした新たな保全団体の結成

を報じた。この企てのあらゆる成功を祈願し、この協会に対して多幸を祈る書簡が同団体の書記に宛てて送られた。以来、徴発地所法案をめぐって、この団体との通信は継続したとの報告があった。

まとめ

ベケットの逝去を受けて新会長に就任したビーミッシュ下院議員が直面したもっとも大きな課題の一つが戦後のダウンランドの土地利用のあり方であった。国政レベルでもスコット・レポートやアスウォート・レポートなどの戦後のイギリスの土地利用に関する報告書が出されていたが、特にSSDにとっての焦眉の急となっていたのがダウンランド内の軍用道路の存在であった。戦後も軍用道路が撤去されずに残った場合、自動車等により利用されることは確実であり、ひいては沿道の土地が宅地化されてしまう重大な懸念が生じていた。SSDは早期の撤去を目指し、手始めにその正確な位置を知ろうと努めたが、一般には立ち入り禁止の区域で実地調査もままならず、軍を始めとする諸機関への照会も要領を得ない状況であった。

その一方で、SSDの20年余にわたるダウンランド保全活動の結果、その豊富な知識と経験が買われ、また「既得権益を持たない」ことが功を奏し、SSDはこの時期も様々な機関や団体から助力を求められた。政府の都市田園計画省からは戦後に向けたダウンランドの都市田園計画の立案に当たって、緊密な協力を求められている。それを受けてSSDでは戦後ダウンランド計画特別委員会を設置した。またナショナル・トラストからも購入する土地の選定について助言を請われている。同省の地域計画官ウォーデルは、国民の土地は国家すなわち政府が購入すべきという主張で、寄付金で土地を購入するナショナル・トラストとは立場を異にしていたが、そのような両者がSSDの助言を求めていたことは興味深い。

このほかにもダウンズにおける「番犬」として、SSDは土地や通行権の保全をめぐる様々な問題に積極的に関与していった。ヘアズウィズ・エステート遺贈の受け入れ、フットパスの閉鎖に関する問い合わせ、スタンマー・パークのスポーツグラウンド化計画への反対表明、徴発地所および戦争工事法案への懸念表明および担当大臣との折衝などである。

とはいえ、政治と宗教の問題については、SSDは慎重な態度を取ったことが窺える。農家の銀行に対する負担問題については政治的であるとして

関与を避けているし、教会カントリーサイド協会の支部設立も宗教的であるとして見送っている。

注

1. Peter Brandon, *The South Downs* (Chichester, 1998), xv.
2. 本稿の史料は英国イースト・サセックス州文書館（East Sussex Record Office）所蔵の「サセックス・ダウンズメン協会運営委員会議事録（The Minutes of the Executive Committee of the Society of Sussex Downsmen）」およびそれに添付された書簡や文書である（整理番号ACC6849）。なお、SSDは現在では「サウス・ダウンズ協会(South Downs Society)」という名称になっている。